

源氏物語真木柱巻における「赤裳垂れ引きいにし姿を」の引歌について

齋藤 由紀子

I. 「憎げなる古言」

内裏にも、ほのかに御覽せし御容貌ありさまを心にかけたまひて、「赤裳垂れ引きいにし姿を」と、憎げなる古言なれど、御言ぐさになりてなむ、ながめさせたまひける。

(小学館古典文学全集大島本源氏物語 真木柱巻)

髭黒に強引に宮中から退出させられた玉鬘を思つて、冷泉帝が古歌を吟く場面である。ここでの引歌には万葉集巻十一 2550番歌

立念 居毛曾念 紅之 赤裳下引 去之儀乎
たちておもひあてもぞおもふくれないのあかもすそひきいにしすがたを

(新編国歌大観 西本願寺本万葉集)

が指摘されている。『校本万葉集』によれば万葉集諸本に漢字本文の異同はない。引歌部分の訓の異同は嘉暦伝承本「あかもすそをひきし」細井本「タレヒキ」(「下」の字の左に「スソ」)である。つまり、概ねの諸本は「下」の字を「すそ」読み、源氏本文における引歌と対立した訓となっている(但し京大本「スソヒキ」だが「下」の字の横に緒で「タレ」)。

万葉集には、他に

朝戸出 公足結乎 閨露原 早起 出乍吾毛 裳下閨
あさとのきみがあゆひをぬらすつゆはらはやくおきいでつつわれももすそぬらさな

のように、「下」を「すそ」よむ用例がある。また

平甕売良我 多麻毛須蘇婢久 許能尔波尔 安伎可是不吉豆
波奈波知里都都
をとめらがたまもすそひくこのにはにあきかぜふきてはなはちりつつ

(新編国歌大観 西本願寺本万葉集 4452)

のように、万葉仮名表記によつて「すそひき」とする歌も幾つか見られる。『万葉代匠記』『万葉考』『万葉集略解』(1)共に、これらの例を挙げて「タレヒキ」の訓を否定している。

一方、『観知院本類聚名義抄』は「下」に「タル」の訓を載せる。注釈書としては、『新勅撰和歌集』『万葉集佳詞』『万葉抄』『宗祇抄』『一葉抄』『類聚抄』『奈良之葉』は「たれひき」として、横に「すそ」といった鎌倉から室町期のものには「タレヒキ」を採用されている(2)。

この歌は古今六帖にも載るが、こちらは「たれひき」としており異同はない(3)。「大成」・『別本集成』によれば源氏本文にも異同はなく、古注もすべて「たれひき」の本文を採用している。特に、古今六帖に一致・嘉暦伝承本に不一致であることは、平安期における万葉享受を考える上で興味深いが、出典の問題は、現存する万葉集以外の本が流布していた可能性もあり、一旦脇に置かなければならない(4)。表現としての「スソヒキ/タレヒキ」の問題に立ち返

つてみよう。もちろん、「裳」は腰から下げるもので、その状態を「垂れ」と訓むこと自体はそれほど不自然ではない。しかし、平安期以降、「裾」はどのように詠まれていったのか。

さなへひきもすそよごるといふたごもわがごとそではしほどか
らじな

(相模集540)

たまくらをかはさむ事はかたくともあとにはふせよもすそひき
さむ

(国基集44)

わぎもこがすそわの田井にひきつれてたごてまなくとるさな
へかな

(夫木集2576 六条修理大夫集206)

今日よりは初卯の花のしらがさねさくらのすそにひきかへてけ
り

(実国家歌合37)

今朝見れば霞の衣竜田山すそのの色もひきかへてけり
(正治後度百首401)

あし引の山下水をひきかけしすそわの田井にさなへとるなり
(続千載和歌集207 千五百番歌合726)

※以上引用及び歌番号は新編国歌大観による。

等「裾+引き」の用例は、平安後期から中世にかけて、万葉享受の志向が高まるに連れて「すそわの田井」等の歌枕を形成しつつ、縁語として定着していく。高田祐彦氏は、この「裳裾」への眼差しの万葉から平安期への変遷を追つておられる(5)。

一方、「垂れ引く」という用例は

わぎもこがあかもたれひきおきていなばしぬとやただにわれこ
ひをらん

(新編国歌大観 新撰和歌六帖1775)

とかなり時代の下つた、古今六帖享受歌に一例、他は近世期にの和歌に極少数見つかのみである。先に示したように、中世万葉学がそろつて「たれひき」の訓を採用しているにもかかわらず、歌語としては定着していないのである。

さらに、散文中においても

…羅の裳あざやかにひき結ひたる腰つき…

(小学館古典文学全集大島本源氏物語 夕顔巻)

のように「裾」は「引く」と表現されている。

小川安朗氏は万葉歌の「裳引」「裾引」は後曳性の美を参照したものであるとされている(6)。腰から「垂れる」「ライン」の美しさよりも、上着の下から後ろへ引かれる裾の方が印象に強く、「裾引く」という表現が広まっていたのだろうか。女性の「裳裾」への関心は美的感覚に止まらず、呪的な意味も探られている(7)。

それでは、何故源氏物語は慣用的な「裾引き」の表現を採用しているのだろうか。

或いはまた、「赤裳」に関しても考察の必要があろう。吉村佳子氏は中国の服飾を取り入れた奈良時代から平安時代にかけて裳の形態の変遷があったことを辿られている(8)。「赤裳」は中国の服装であつたと考えにくい。歌語としても、万葉集の用例数に比して、さほどの定着を見出せない。

この様に問題を孕んでいるが故に「憎げなる古言」と評されるのであろう。それならば、何故、実景・表現両面に異和感が生じる万

葉歌が引用されるのか考察したい。

II. 異類婚姻譚における「赤裳」

万葉集当該歌の「紅の赤裳裾引き」という表現に関して、小学館古典文学全集頭注は、「歩く女の優美な姿を述べる常套表現」としている。そして、類歌及び、日本霊異記上巻第二話「狐を妻として子を生ましめし縁」

故誦夫語而來寐。故名為支都禰也。時彼妻著紅欄今桃花云裳也而窈窕裳欄引逝也。夫視去容恋歌曰、

古比波未奈和我宇弊邇於知奴多万可支流波呂可邇美江天伊爾師古由惠邇

故、夫の語を誦えて来り寐キ。故、名は支都禰と為ふ。時に、彼の妻、紅の欄染の裳今の桃花の裳を云ふ。を著て窈窕びて裳欄を引きつつ逝く。夫去にし容を視て、恋ひて歌ひて曰はく、恋は皆我が上に落ちぬたまかざるはろかに見えて去にし子ゆゑに

(小学館日本古典文学全集『日本霊異記』)

とある例を挙げ、女が男の元を去っていく場面を想定している。

日本霊異記の狐女房譚が万葉歌を利用していることは『万葉集全注』で稲岡耕二氏に指摘されている。また、霊異記のこの場面に関して、三谷邦明氏は万葉集中の「赤裳」の歌を媒介としながら「赤」という色が怪異と孤高の美を生み出していることに早く注目しておられた(9)。

白氏文集卷四新樂府所収の「古狐塚」にも

古塚狐妖且老化為婦人顔色好頭變雲髮面變粧大尾曳作長紅裳

(金沢文庫本白氏文集)

とある。狐の大きな尾という特徴が後姿の印象に結びついていることが分かる。

或いは、任氏伝にも

崑周視室内、見紅裳出於戸下。迫而察焉、見任氏戰身匿於扇間。崑引出就明而觀之、殆過於所傳半。崑愛之發狂乃擁而凌之、

(新釈漢文大系 唐代伝奇)

という場面がある。ここで「赤裳」は崑が隠れた任氏を見出すきっかけをつくり、崑は任氏の美しさに我を忘れていた。

狐女房譚を離れて、遊仙窟でも、仙境の神女に擬えられる、積石山に住む十娘の美しさを称える詩に

相著未相識 傾城復傾国 迎風幘子鬱金香 照日裙裾石榴色

(岩波文庫 遊仙窟 底本醍醐寺藏本遊仙窟)

というくだりがある。醍醐寺藏本では「裾」の字の左に「モノスソ」という訓が付されている。異界の神秘的な女性の美しさを表現する類型であることが推測される。

時代は下るが、この類型化は『太平廣記』『狐類』の女性に変わる狐の例にも見える。

・・・河西岸水濱有女紅裳。浣衣水。・・・

『太平廣記』所収『紀聞』

「赤裳」は神事の際の料であったことは、先にも述べた。そうしたことから、「赤裳」が漢文学から万葉集や霊異記を経て源氏物語

へ取り込まれる過程で、日常から離れた神秘的なイメージを、さらに色濃くしていたはずである。

夕顔に関して任氏伝の引用があることは既に指摘されている(10)。源氏に対して素性を明かさぬ彼女の。その夕顔の娘玉鬘もまた、西国という、都世界から遠く離れた、一種の「異界」からやってきた、身元の不安定な「さすらふ」女性の系譜に列なる(11)。この「赤裳」という引歌は、冷泉帝の彼女に対するそうした視線を表現するものではないだろうか。

III. 玉鬘物語における引用

玉鬘の異界性について論じるならば、玉鬘十帖における竹取引用についても考えなければならぬ(12)。かぐや姫もまた、男の元から異界へと去って行くという点で、当該歌の状況を喚起させるからである。訓の問題に立ち返ってみても、単に「裾引く」といった場合よりも、「垂れ引く」とした時、それは裾を引いて上方へ移動しているイメージを与えられる。それは、正に月へと上昇していくかぐや姫の状況ではないだろうか。

しかし、かぐや姫の昇天の場面には「赤裳」は現れない。代わりに、かぐや姫の衣装は「天の羽衣」であった。これは中国に於ける姮娥伝説、毛女伝説、月上女経等を含む女仙伝、万葉集巻十六の「竹取翁」の歌群や中世歌学書に現れる他の天人昇天譚についても同様である。(13)

三谷栄一氏は、『江家次第』の記事を挙げ、元々「羽衣」は大嘗会や新嘗祭の際、天皇が「神聖なる神の体となる」ための「神衣」であり、単なる飛行の具ではなく、「天人の資格」を得るための衣であることを説いておられる(14)。

対して「赤裳」は述べたように、神事に関わる衣服であるという点では共通しているが、「羽衣」のように、自身がではなく、むしろ神に仕える巫女のものである。物語中で玉鬘が身に付けていたの

は、おそらくは、宮廷女官の服飾として令で定められた紅袴であると考えると、それは、やはり「仕える」ための「臣下」の衣装としての性格を持つ。

或いは、衣服の変化を考慮から外し「裳」という語に焦点を当てるにしても、源氏物語中の「裳」は、例えば、蜻蛉巻に登場する、零落した式部卿官の娘、宮の君について

限りあれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかりひき懸けたまふぞ、とあはれなりける。

(小学館日本古典文学全集大島本源氏物語 蜻蛉巻)

と描かれるように、「仕える身分」を象徴するものとして現れている。

先に、万葉歌の訓のゆれとして冒頭で問題とした「垂れる」という表現には、ただ「引く」といったときよりも、移動している主体が上昇していくイメージを呼び起こす、としたが、さらに、付け加えれば、上方から下方への重力を感じさせる。「羽衣」を身に纏い天上へ去っていったかぐや姫と「赤裳垂れ引き」官中を辞して髭黒の元へ帰る玉鬘と。後日譚竹河巻において、大臣髭黒亡き後の家刀自として右往左往する、玉鬘の有様を鑑みれば、その内情の差は歴然たるものがある。竹河巻において、実質的な出仕はしていないにも関わらず、「尚侍君」と称されることも、彼女が、辞して尚、後宮の秩序内にとり籠められていることを象徴しているだろう(15)。上昇しつつ重力に抗いきれない主体、それこそ玉鬘の状況である(16)。

こうして竹取物語と玉鬘物語を比較してみると、玉鬘が「垂れ」引いた裳は、彼女を地上の論理に繋ぎ止める象徴のように見えてくる。「赤裳垂れ引き」という万葉歌を通して、玉鬘物語は「異界へ去る女」のイメージを取り込み、「垂れ引く」という微細ながら、しかし、歌語としては違和感を持つ表現を用いていることによって、竹取物語へと接近しながら、差異を表出しているのである。

注

- (1)『万葉代匠記』契沖全集 岩波書店 『万葉考』賀茂真淵全集
続群書類完成会 『万葉集略解』国民文庫刊行会
(2) 渋谷虎雄『古文獻所収万葉和歌集成』による。因みに、この歌は人麿集では『柿本集』(書陵部蔵 私家集大成中古1 人麿集Ⅱ)に載るが、「あかもものすそを引きし」で、この部分については嘉暦伝承本と一致。注(4)でも触れるが、平安期の多様な万葉歌享受のあり方を考えさせられる。
- (3) 中西進『古今六帖の万葉歌』武蔵野書院64・6
(4) 源氏物語が現在の『万葉集』からではなく、『古今六帖』等から撰取していたことは池田亀鑑氏の『万葉集と源氏物語—引歌に関する考察』『万葉集講座2』春陽堂33・4で早く指摘されていた。鈴木日出男氏は『源氏物語における万葉歌の流伝—その階梯的考察—』『上代文学』66・1において源氏物語の万葉歌の引歌が作者不明歌に集中し、歌語が古訓から変化しているものが多いことを明らかにした上で、伝誦という形態をとったことを推定されている。このことは、源氏物語が万葉集歌の伝承を様々に撰取していることにもつながってくる。
- 一方で、源氏物語が梅枝巻に「古万葉集」という「書物」としての万葉集を登場させていることも見過ごせない。この「古万葉集」については、中西進氏の『続・万葉集の形成(上・下)』『成城文芸』68・6『成城国文学論集』69・11等で展開されているような『万葉集』自体の成立の問題と関わらせて考察が必要であろう。小川靖彦氏は『万葉集』原本の体裁(題詞と歌の高下・序論)—平安時代の写本の歴史的検討を通じて(書物としての『万葉集』)—『日本女子大学紀要 文学部』01・3で平安期における万葉集の書写について詳細に調査されている。源氏研究の立場からは、特に道長周辺の『万葉集』書写活動が注目される。また、氏の指摘される万葉書写の王権への関わりは梅枝巻における明石女御入内の背景にも関わってくる。

る。

平安期に『万葉集』は現在のような形でのみ享受されたわけではなく、『類聚古集』のような抄出本の流布も予測されている。そうした意味で、源氏物語における引用を論じる際、歌題索引的な『古今六帖』による享受についても考えてみなければなるまい。安部素子氏は『源氏物語』の引歌—『万葉集』の場合—『尚絅大学研究紀要』96・2において、源氏物語引歌が採用する万葉集歌が古今六帖及び集の訓に一致することを検証され、そのどちらにも一致しないものについて、「現存しない『古今六帖』のようなものを想定せざるをえないが、現在のところ何とも言えない」としておられる。

『古今六帖』に関しては、その類聚性についても考えなければならぬであろう。引歌は時に物語の表現を点ではなく線で結ぶことがある。藪葉子氏は「真木柱巻における叙述と『古今和歌六帖』との関わりをめぐって—玉鬘にまつわる表現において—」『武庫川国文』00・3で当該場面の引歌について、やはり訓が古今六帖と一致することに着目され、さらに古今六帖「裳」の項の他の歌と合わせ、六条院を彩る「くさはひ」としての玉鬘の「山吹」の喩と関連するものとして論じておられる。氏の古今六帖歌の項目ごとの享受についての一連の御研究、『源氏物語』と『古今和歌六帖』の関わりをめぐって—須磨巻と第五帖「ふえ」の歌群との検証から—『王朝文学研究誌』99・3等と合わせて、説得力をもつものと思われる。源氏物語の表現の方法に深く関わらせて考えていく必要を教えられ

さらに、平安期和歌における万葉集の受容について様々な万葉歌ことばについて多くの力論がある。ここにそれを漏らさず挙げることに出来ないが、源氏物語の表現が和歌の表現史と無縁ではありえない以上、源氏物語の万葉享受も、そちらと合わせて検討していく必要がある。

源氏物語が万葉歌を引用するにあたってのプレテクストを限定することは難しい。それは、先行諸研究が示すように、万葉歌が極めて流動的な形で享受されていたからである。源氏物語は、その表

現の揺らぎを逆手に、より豊かに彩られているのではないだろうか、というのが本論の段階での推測である。現在の引歌研究の成果を取り入れつつ、万葉諸本の訓とも照らし、源氏物語の「読み」に切り込んで考えていくことを自らの今後の課題としたい。

- (5) 高田祐彦「田子の裳裾」について『近代』97・12
(6) 小川安朗『万葉集の服飾文化 下 万葉人の服飾感覚』六興出版86・7
(7) 真下厚『赤裳裾引き行くは誰が妻』万葉行幸従賀歌の景『日本文学』92・1
(8) 吉村佳子「唐衣・裳形式の成立に関する一考察」『服飾美学』98・3
(9) 三谷邦明「東洋文庫『日本霊異記』によせて—ある微細な美の戦慄—」『文藝と批評』67・11
(10) 新聞一美「もう一人の夕顔—帚木三帖と任氏の物語—」『源氏物語の人物と構造』中古文学研究会編 笠間書院82・5 田中隆昭「歴史と虚構と源氏物語—夕顔巻のものけについて—」『源氏物語と日記文学 研究と資料』武蔵野書院93・2
(11) 長谷川政春「源氏物語の〈さすらい〉の系譜」『物語史の風景』若草書房97・7
また、「さすらふ」女君の系譜には浮舟も挙げられるが、岡部明日香氏は手習巻で浮舟が「紅袴」姿で発見され「変化」と過たれる場面に白氏文集「古狐塚」の引用を指摘し、浮舟の異界性を読んでおられる。岡部明日香「手習巻と新楽府—女性の罪と救済の関わりから—」『平安朝文学研究』99
(12) 後藤祥子「共同討議 玉鬘十帖を読む」『国文学』87・11 「宝冠瑠璃姫と瑠璃姫—夕顔と玉鬘に見る竹取物語」『早文会論集』87・12 小嶋菜温子「闇のエロス」『richko』95 特に小嶋氏の御論は玉鬘物語における、反転した形での竹取引用を指摘しておられ、本稿Ⅲ節を考える上で啓蒙された。
- (13) 竹取物語の「羽衣」の源泉を中国伝奇に辿った詳しい論には君島久子「姮娥奔月考」武蔵大学人文学会誌74・3等

- (14) 三谷栄一『竹取物語評解 増訂版』有精堂88・9
(15) 後藤祥子「尚侍攷」『源氏物語の史的空間』東京大学出版会86・2
(16) 拙稿「玉鬘物語が孕むもの—竹河巻の位相—」『瞿麦』99・6